
とある暁の企画(プロジェクト)

平井純譚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある暁の企画（プロジェクト）

【Nコード】

N08610

【作者名】

平井純譚

【あらすじ】

原作が落ち着くまでの時間稼ぎとして始まった企画
お馴染みのメンバーにサソリが加わり、珍道中の旅を繰り広げていく物語

シリアス展開一切なし

原作を大切にしたい人は、見ない方がよろしいかも……？

1、いきなり企画発表（前書き）

注意！！シリアス要素はありません

この小説を読んで時間の無駄と感じたら「戻る」をどうぞ
人气が全くでなくても更新して行きますので…

それでも構わないと思う方だけお入り下さい

1、いきなり企画発表

休載が決定してから約1ヶ月半……サソリが出てくる原作コミック「NARUTO」で死んだはずのサソリが復活してしまうハプニングに見舞われ執筆活動を一度断念するという苦渋の決断を下した。そこで、NARUTOの騒動が収まるまで時間潰しの企画をしようということになり、我々は、今まで後書きのオマケで連載していた企画を本編に堂々と載つけてみるという暴挙に打って出た。今回はこのシリーズの始めとしてこの企画からスタートさせたいと思っている

後書きオマケより

次回作のためにサソリがスペインで最も熱い祭りである「牛追い祭り」を視察している時に話を戻したいと思います（この辺を覚えおくと先の展開がわかりやすく(?) になります）

前回のグダグダな企画を反省したオレ（サソリ）は、もっと読者を熱狂的にさせるような熱い企画を求め、単身スペインへと飛んだ。

旅行会社のパンフレットを片手に毎年のように死者が出るという有名な牛追い祭りを実際に視察してきた……

スペイン北部の街である「パンプローナ」

7月に行われる牛追い祭りは、世界中から集まった血気盛んな者達が白と赤の衣装に身を包み、街に放たれた荒ぶる牛を命懸けで闘牛場まで追い込むというのが有名である。

（正に、今回の企画に打ってつけではないか……）

サソリは、初春から借りた家庭用ホームビデオを持って熱く燃えた

ぎる闘牛場まで歩いて行った。

しかし、闘牛場に着いたサソリを待っていたのは想像遙かに超える危険な行事を目の当たりする。

闘牛場に追い込んだ牛を素手で取り押さえるという荒々しい行事

その名も「素人闘牛」

その戦慄の映像をサソリの撮ったビデオでご覧頂こう……

黒光りする獰猛なる牛が闘牛場のエリアにいる一人の屈強な男性に向けて鋭い一撃を与えた。

男性は、いとも容易く突飛ばされ一瞬、頭と足が逆の位置にきたかと思うと闘牛場の床にねじ伏せられる。しかし、牛はターゲットをこの男性にロックオンしているのかのように執拗な攻撃で男性の闘争心をへし折る。頭を蹄ひづめのある脚でがっちりホルドした後に男性のがら空きとなった胴体を角で串刺しにしようと突き立てた（安全には配慮しております）

その後も軽々と別の男性を持ち上げたりとエリアを縦横無尽に闊歩していく牡牛

二人がかりで抑えつけようとするが無駄である

「スゲ……是非とも御坂にあれを……」

一応、レールガンがあるから大丈夫だと思うが…

佐天に対しても以下同文

牛に突き上げられた男達がいとも簡単に宙を舞う……その光景を自身の臉とビデオのフィルムに焼き付けサソリは、日本に帰国を果たす。

あれから1年……そして今年も牛追い祭りの季節がやってきた……

7月11日(月)

午前5時45分

常盤台中学正門前

本日の企画発表のため遠距離旅行のためのバッグを装備した御坂と佐天がカメラの前に姿を現した。

企画を事前に知らされている佐天の服装は、Tシャツにデカデカと牛が印刷された物と赤いスカーフのような物ど彩られている。

対して企画内容を知らない御坂は(といっても牛追い祭りが関係していることは頭に入ってる)不安な表情のまま普段着のような白い肌着とジーパンに身を包んでいる。

若干天候がすぐれないので一枚上に羽織って……

二人が立つ間には企画発表で使うだろうとされている黒いボードが鎮座しており(朝○バツ!!!でみのさんが剥がすみたいなもの……何故か角みたいなのが出ているのが気になる)出番を待つ。

「どうも!!!皆さんお久しぶり!!!佐天涙子です!!!!」

「久しぶり……」

明るい感じの佐天に比べて若干不安気な御坂

「どうしたんですかー!!!久しぶりの復活ですよ!!!(時間稼ぎですけど……)テンション高くしていかないと持ちませんよ!!!」

「いや……空気を読む限りじゃ……そんな良いモノじゃないのはわかるんだけどね……それに、この季節だと凄い祭りが外国の方であった気が……はあ……」

今回の企画のキーワードの香りがする物達をうらめしそうに眺めながら御坂がうなだれている。

今回の企画に合わせるために御坂達には「7月上旬の予定は、空け

ておけ!!」という緊急連絡網が入り現在に至る。

「あの祭りに行くのにニコニコしながら行けると思う!!? テレビの衝撃映像特番で毎回エントリーされてるのよ!!………どうなのよ限^{くま}」

限↓サソリ

「いや……まだ企画発表してないからそこに行くかはまだわからんぞ……」

「あつそ……（もう、どうにでもなればバカヤロー!!一応コインは多めに持っていていかないと……）」

御坂さんの文句は後で聴くことにして企画発表の続きへ

「まあ、言いたいこともたくさんあるでしょうけど!!御坂さん、あたしの今日の扮装どうでしょう?」

確認ですけど、佐天の服装はTシャツに牛がプリントされ赤いスカーフのような物が装備されています。

「うむむむ……「まんま」って言うコメントしか出てこないわよ）どう頑張っても!!」

獰猛なる牛が屈強な男をひねり潰す映像が頭をよぎる「もっと言っちゃうとね……このボードもまんまよ!!」

企画発表のボードに謎の角が……

（回想）

五人がかりで牛を抑えつけようとするがいと容易く牛は、五人を地面に落としてしまう

「とまあ、今回は最初の記念すべき企画なので手作りだがボードを作ってみた……」。御坂が後ろに用意されているボードを腕を組みながら見ていく。

「もう……角はあるわ、佐天さんの服装もおかしいやらね……」

「あとは、今回から初春がカメラ操作をしてビデオを撮影していくからな……記録として残す予定だな」

「よろしく願います」

初春が家庭用ホームビデオを片手に挨拶をした。
(カメラ操作だから出番があまりないが……)

「ゲスト紹介!」

「えっと…(カンペを見て)…ああ、今回のゲストの発表ですね!
!……それでは紹介します」テレポーター「空間移動能力者であり風紀委員で初春
と共に活動してらっしゃる「白井黒子」さんです」
佐天の華々しい紹介と共に白井が二人の前にテレポートをして出現
する。

「お久しぶりですわ皆様!!お姉様(御坂)の人生の伴侶であり日
夜お姉様に近づく男共に血の鉄槌を……(以下略)」

まるで演説のような長い自己紹介のため割愛させていただきます。

「黒子!!アンタも呼ばれての?」

御坂が質問すると

「はいですの!!付いてくればお姉様と旅行が出来るかと佐天様が教
えてくれたのでございますわ!!」

全く内容を知らされずに御坂に食い付いたようだ。

「……………」

御坂が佐天や企画発案者のサソリを恨めしそうに見てから腕を組ん
でため息を吐く。

「つまり……企画の全容を知らないのは私と黒子でいいわね」

「企画発表」

「じゃあ、いよいよ…発表するか…」

サソリがそう言う waited ましたと言わんばかりに佐天は「タンバ
リン」を初春は「紙吹雪」をそれぞれやって場を盛り上がらせる。

「では、まだ企画を知らない二人の為に、こちらのボードを使って
発表しちゃいますよー!!」

佐天がボードのすぐ脇を陣取り話しを進めていく。

企画タイトル発表！！！！

「でわ！！行きますよ！」

佐天がボードの一番上にあるドッグイヤー（折り返しのような所）を指で掴んで一気に剥がす。

まず出てきた文字は……

「激闘！！」

「オオオオ！！……まず最初にくるのね「激闘！！」」

タイトルの頭に激闘が付いちゃいます。

2枚目

佐天がわりと小さめの物を剥がすと、まず出てきたのは「御坂美琴」

とりあえず…御坂参加決定（当然ですけど…）

続いて佐天がすぐ隣を剥がすと「佐天涙子」という文字が出現した。またまた隣を剥がすと「白井黒子」も参加決定！！

ここまで出てきた文字の整理をすると……

激闘！！

御坂美琴

佐天涙子

白井黒子

~~~~~

ここまでだとまだまだ企画の全容は解明出来ない。因みに、ドッキリで連れて来られた白井さんは

（何の話でしょうか…盛り上がってますわね…）

すっかり蚊帳の外

3枚目

佐天が3人のエントリー者の名前の下に手をかけてゆっくりと剥がしていく（割りと長め）

出てきたのは……

「トップは私だッ!!」

出てきた文字に驚きながらも御坂は何とか解明しようと脳をフル稼働させて……

「くううう……トップがあるということは……競争があるという意味ね」

競争……

御坂の頭の中に獰猛な牛達から必死に逃げるスペイン人がよぎる。

そして佐天は得意気に2枚飛ばして6枚目を引き剥がそうとする。

「えっ!!そこ!?!」

6枚目

ボードに隠されていた要の文字がついに姿を現してしまった……

「追い祭り」

あまりに予想通りの言葉に思わずのけぞる御坂

「ああっ!!おーいまつり!!」

追い祭り

屈強なスペイン人が牛に投げ飛ばされていく映像が……

「なんか馬鹿馬鹿しくなってきたけど……ここは最後まで行くぞ」  
無表情なサソリがリアクションの大きい御坂をたしなめるように言った。

佐天は、追い祭りの前にある「生き物」が封じ込めてある所に手をかけて引き剥がそうとするが

「待つて！！今手にかけている所を見ると……二文字に分けられるの！！？平仮名？」

そう、御坂の指摘通りに「追い祭り」の前には折り返しが2つ用意されているのだ……つまり佐天が手にかけているのは、二文字の平仮名の内の最後の文字である。

読者の皆様も予想してご覧いただきたい。

5枚目（平仮名の内の後ろの方）

現れた日本文字は……

「し」

「iiiiiiー！！！！やっぱり……思った通りよー！！」

○し

屈強なスペイン人が…

いよいよ次の文字で企画の全容が解明されるようだ。「じゃあ、行っちゃいますよー！！御坂さん」

運命の飛ばした4枚目

佐天がゆつくりと4枚目の折り返しに触れ…十分に間を空けて一気に剥がした。

出てきた文字は！！？

「む」

????

「えッ??む、むし追い…？」本気でリアクションに困る御坂キヨロキヨロとボードと佐天の間に視線を行き来させている（傍から見るとミリアキヤットみたいな動き）

「な、何が起きたの…これは一体…？」

「御坂さんがリアクションに困ってるー！！かわいいですよー！！」  
佐天がいたずらに笑みを浮かべるが当の本人は、それどころではない……

さらに、佐天は最後の折り返し部分を剥がして御坂に企画の全容を見せる。

激闘！！

御坂美琴

佐天涙子

白井黒子

トップは私だッ！！

むし追い祭り

in 西表島

「つーわけで記念すべき最初の企画は、南の島 沖縄で虫取りに行くぞ……」

サソリからの付け足しの説明

「つまり昆虫採集となりますー！！」

佐天が何処からが出した麦わら帽子と虫取りアミを持ち出して誇らしげに言った。

因みにボードの形は「牛」ではなく「クワガタ」だそうです。

「そう……日本よね？」

「ああ、西表島って書いてあるからな……」

「とある暁」初上陸！！

パチパチ！！ パチパチ！！

「やっちゃったわね…アンタ！！原作ファンから思いっきり叩かれそうな企画をね……」

「所詮、時間稼ぎだからな…原作が絶対にしないことをさせてもらっぞ……」

とりあえず企画のタイトルは……

「とある激闘の西表島」 御坂と佐天、白井が己の能力<sup>ちから</sup>全てを出し切って昆虫採集に全力を尽くす。

優勝は誰の手に!!!

次回、西表島から競技スタート!!

ところで……

「牛追いは、どうなったの？サソリ」

「あ!!……いやあれは、去年見たから……別にいいかなと思ってな……」

「下見でしょ!!アンタが見たからってやめられても!!……困っちゃうわよ」

飽きっぱいサソリのおかげ(?)で御坂達の命は救われたようです。

## 2、激闘前夜の愚痴とまさかの企画変更!!（前書き）

先日、友人達と集まって「本当にあった 呪いのビデオ」のDVDを見てきました。

どれもガチで怖かったんですが……一番怖かったのは「映っている人の大半がお亡くなりになっている」という事実（だから、地上波で放送できない）

興味のある人は、TSUTAYAで借りることが出来るので見てみて下さい。

正直言つと「呪怨」や「ほん怖（ほんとうにあつた怖い話）」が子供騙しに思えてしまうほど……

## 2、激闘前夜の愚痴とまさかの企画変更！！

東京↓那覇

とあプロ（とある暁の企画の略）グループは、一同南の島へと駒を進めていく。

那覇↓石垣島

戦場となる西表島のすぐ隣に位置する石垣島で本日一泊  
西表島に入ってから撮影する予定だったが御坂から申し立て（苦情）があり急遽撮影を開始してみる。

石垣島のとある旅館↓

現在の時刻 夜10時

「さあ、ようやく前哨戦となる石垣島に到着しました！！約2ヶ月ぶりの「とある暁」ですから気合いが入ります！！！」

佐天のアナウンサーのような話から切り出された前哨戦

しかし……御坂からの苦情により事態がとんでもない方向へと傾いていってしまうのであった……

「ちょっと！！なんなのこの部屋？」

「ん……？」（サソリです）

「この部屋は何って訊いてるのよ！！！」

「……この部屋で四人（御坂、白井、佐天、初春）寝て貰うが……」  
サソリが部屋一面に敷き詰められた畳をポンポンと叩きながら言う。  
その畳の上には、無造作に敷き布団があり四人分しっかりと布いてあった。

「あのさ、石垣島ってね那覇と同じような発展してるのよ……」  
来る途中にあったでしょ「石垣グランドホテル（高級ホテル）」が  
！！」

「あつたな……」

御坂が旅館の一室からグランドホテルがあると思われる方角を指差しながら、更なる苦情の意を込める。「ここのクーラーは何？」「26度以上にすると悪臭が出ます」っていう貼り紙があるけど（クーラーの脇に注意書きがありました）……私さあ、あんまりお金のこと言いたくないけど、「この部屋一泊、三千円」……！」

御坂が指を三本立てて部屋を一望する。  
何回見ても四人でギリギリの場所だ。

「それにさ、ここの撮影だって急遽でしょ……言ってたじゃない前話で「次回は西表島からスタート！」って……つまり、ここは撮影するつもりじゃなかったんでしょ!？」

「ああ、無かったが……」

「撮影するつもりじゃなかったのに「三千円の部屋」ってどういうことよ!……！」

「いや、四人仲良く相部屋で……」

「あんまりないわね……この四人で寝泊まりなんて……サソリ、まだ企画は始まってないのに……愚痴でこの回使っわよ!……」

バチバチと電流を発生させサソリに威嚇する御坂。

まだまだ不満があるらしくサソリの襟元を掴んで軽々と持ち上げた。さすがに、マズいと思った佐天と白井が間に割って入り興奮気味の御坂を宥める。

「御坂さん、落ち着いて下さい!!!」

「そうですねお姉様、ここは穏便にことを運びましょう（お姉様との離島での相部屋……サイコーですわ!!!）」

それぞれの思惑がある中、更にサソリから爆弾発言が飛び出す

「ここはいいが……西表島行ったらオレも同じ部屋だからな」

「な、何いいい!!!!どういうことよ!!!それ?」

こうして死闘の前日が更けて行った。

とあプロの五人は、明日から過酷な旅路へと出発するのである。  
ちなみに……

「明日、サソリと一緒にの部屋……ど、どうしょ／＼／」  
佐天が顔を赤らめていることには、誰も気が付かなかった。

\*\*\*\*\*

翌日の午後3時30分

沖縄県 西表島（虫取り戦場）

「という訳で……東京から飛行機に乗りまして無事、西表島到着……  
……ただいまの時刻まで皆で休憩（たつぷり昼寝）してここまでできたぞ……」

「この到着時刻が朝の10時で集合時間が一応2時だけど……なんとなく1時間押したわね」

その時の会話

「2時になりましたよ」（初春）

「ん……やっぱ3時……」

というサソリの一言で3時になりました。

（あれ（夜の撮影後）から、地元のガイドグループと念入りな打ち合わせをしていたため……）

「いや、反対意見がなかったから……」

サソリが右手をヒラヒラさせながら飄々と答える。

「確かになかったわね……佐天さんはずっと寝て、最後うなされて起きただけ」

「うわー！！よく分かりましたね御坂さん！！」

佐天がびつくりしながら御坂を少し遠巻きに見る。

いよいよ本題

「じゃあ……今回お世話になるガイド……」（特別ゲスト）畜生道さんから色々話を聞いた所…今回の企画は「むし追い祭り」

となっていたが……畜生道が言うには、「むしはつまんない……」  
ということらしい……」

むしはつまんない

むしはつまんない

むしはつまんない（エコーでお願いします）

「衝撃の一言ね……」

まさに企画全体が否定される事態に陥ってしまった。「むしがいねえらしい……」

「「むしがいない」って…私達何しに来たの？」

虫を取るとい大前提で西表島（戦場地）に上陸した我々……しかし、ガイドからのある意味容赦ない宣告により企画を変更せざるおえない状況に先が思いやられてしまう……

「むしなんかよりも…もっと素晴らしいモノがあるということなんで（例えば海）……」

サソリの一言により女集は背景に広がる真っ青な海を一望する。

空がまるで溶け込んだような海原が「泳いで!!」と言わんばかりに波を砂浜に寄せては反し、寄せては反しといった感じであった。

「まず海から始めてほしいだとよ……」

畜生道さんがそう言いました。

ガイドの畜生道さんは東京では滅多に見れないモノを我々に見せたらしいです。

というわけで……

「はい、全員水着に着替えて再び西表島の海の前にやってきました」  
メンバーの水着姿は、アニメとほぼ同じ設定です。

しかし……

「なんで、わたくしの水着はダメなんですか？……」

「ダメに決まってるでしょ（ます）！！！」

白井の過激過ぎてNGとなった水着もアニメ参考（白井はスクール水着となりました）

全員の着替えが済んだ所で舞台は、西表島の浜辺に移行した。

この時期の西表島には有名な「クマノミ」がうようよいるためガイドの畜生道は無言で腕をならす。

## 第一競技

「西表島の水中生物捕獲決戦！！」

アミですくってポイントゲット！！……んっ！！？

御坂が何かに気付いたかのようにサソリと初春に視線を向ける

「ところでさ…持ってきてるの「水中カメラ」？…それないとダメじゃない…？」

水中カメラ？

（水中の素晴らしい映像を後生に残すための装置…海に潜る番組では必ず使われる）

それに対してのサソリは、目を大きく広げて「あっ…」とボソリと言う

×水中カメラ

最初、虫取りの予定でしたので必要ないと判断して持って来なかったそうです。……どうすんの！！？

## 打開策

「……じゃあ、水槽があるから中に生物を入れてカメラの前に持ってきてればいいだろ……」

なんとも原始的な！！

「アンタね……今のテレビでせつかくのクマノミを撮るのに水槽に入れて持ってくるのってあまりないわよ！！それだったらそこら辺にあるペット売り場で撮るのとかわんないし！！」

的確な突っ込みに佐天が静かに拍手する。

「おお、さすがですね」

どちらかといえばこの状況を楽しんでいるらしい。

もう一つの打開策として「のぞきメガネ」を用意したが役に立つのかは不明である。

ちなみに夜には大きなウナギを捕獲しにいくので日中だけの競技となります。

むし追いはどうなった！？と訊かれると困ってしまいますが三人の激闘と憔悴しきる様を見ていただきたい。

\*\*\*\*\*

クマノミのいるポイントを探す

「じゃあ……お願いします」「はい……では見つけたら合図を送りますので来てください……」

ガイドの畜生道さんは、紫色のビキニとパレオを着て颯爽と西表島の海にダイブした。

畜生道は、本編とは違い意志を持った人間としてクマノミを探しに行ってます。胸は小さめですが頑張ってます（↑？）

畜生道がポイントを見つけるまでその場で待機となったメンバー。ジリジリと太陽が直接肌に当たり少々暑い。

「今の状況って何……？サソリの「お願いします」という一言でビキニの女娘がクロールで泳いで行っただけ……」

「撮影するポイント考えなさいよ！！！！前もって見つけておくとか

してしてさ！！読者の皆様に気の抜けた画をお届けできないわ！！」  
「お姉様！！電流が出てます！！引っ込めて下さい！！！」

危つく西表島の豊かな生物群（クマノミも含む）が浜辺に大量に打ち上げられるところでした。

ガイドの畜生道さんに会話の焦点を合わせる。

相変わらず、ポイント探しに奔走する畜生道に対しても御坂が文句（突っ込み）が炸裂する。

「これから私達は、あんな画（泳いでいる姿）しかないわよ！！水中カメラもないんだから！！」

紫色の水着を着ている畜生道を指さしサソリに今の状況の深刻さを伝えようとする。

「いや……なにかなるだろ……お前が主役なんだから面白くしろ……」

「何よ！！全部こっちで現地調達して全く！！私と初春さんが虫取りアミを探しにいくのにどれくらい時間かかったと思ってるのよ！！企画発案者は、アンタでしょ！責任持ちなさいよね！！」

探し回る畜生道さん

すっかり沖の方に行ってしまったガイドを見ながら佐天が口を開く。

「あの……このまま1時間ぐらい待たされませんよね……？」

白井「見つけるまで絶対やめないタイプですわね……」

サ「それじゃ……畜生道が楽しんでいるだけだな……」

御「そんなマニアックなビデオないわよ！！」女の子のシュノーケリングをずっと砂浜から撮っているビデオ「なんて！！」（ちなみに、沖の方にいるので人物は小さめです）

すると畜生道がポイントを見つけたらしくサソリ達の方に手を振る。

いざ、海へ！！

全員で海に入りポイントへと移動

初春さんもカメラを落とさないように頑張っています（落とすと壊れるので…）

のぞきメガネをカメラに装着して海の様子を撮影。

初春↓カメラ操作

サソリ↓カメラに合わせてのぞきメガネを装着という作業分担。

「結構…深いですね」

初春がカメラから覗いた光景は、少し緑がかった水中の世界（まだ、魚の存在は確認できず）

深さは、皆の胸より少し下くらいである。

そのため初春は、カメラを水につけないようにするために常時、胸元より上で撮らないといけないため華奢な初春には大変な重労働となる。

よって……

「休憩するんで切っていいですか？」

「ダメだろ！！」

全員からの問答無用の突っ込み。

水中カメラに挑戦！！

サソリが魚を入れる水槽を片手に初春の所に歩みよりある提案をする。

「この（水槽）中にカメラ入れたら水中の様子が撮影できるんじゃないか！？」

「あ、私も思いました！！ちょっとやってみますね…」

カメラを入れて水槽に水が入らないようにゆっくりと沈めてみた。

（水槽カメラ）「おお！！これは立派な水中カメラですね！！サソ

リさん……」

「アンタ達何やつ……ちょっと！！何チャレンジなことしてんの！！水入ったら終わりじゃないの！！！」

泳いでいた御坂が二人の実験的な会話を聞き取ったらしい……

水槽を没収され、再び初春の身体に家庭用カメラが重くのしかかる。

ちなみに……今回撮った水中映像は、濁っていて上手く映ってなかったそうです。

### 3、地味な激闘と伸びないポイント数（前書き）

やっただけ！！エルギオス（ドラゴンクエスト？のラスボス）を倒したぞぉ！！

一人旅（仲間をつくらずに主人公だけで）でクリアしました。

まだ、冒険できるらしいのですが私はこれで満足です。

いやゝ転職は大切ですね！！

### 3、地味な激闘と伸びないポイント数

一同畜生道の見つけたポイントへ移動。

紫色のビキニを身に付けた畜生道が黙ってポイントを指差し、それに初春のカメラが水槽を用いて生き生きと動くクマノミ等を捉えようとした。

水槽の中を通してのカメラでの映像

主に、緑色の濁りで視界がはつきりしない。

佐天「いっぱいいます」

サソリ「おい、撮れてるか？」

初春「はい？」

御坂「ちよつと！！水入らないようにしなさいよ！！もつとこつち寄らないと撮れないわよ」

白井「初春もつと前に出たらどうですか！？」

畜生道「寄っても大丈夫……」サソリ「逃げねえようだ……早く撮れ……」

初春「皆さん静かにして下さいよ……集中出来ません」

なんとか、珊瑚に生息する青い魚達を撮ることが出来たようです（撮れるまで紆余曲折した面がありますが……）

しかし、初春が必死に水と闘って魚を撮っていると御坂の真っ白な足が通過する。

「あつ！！御坂さん！！魚が消えましたけど……」

「お前何やってんだよ……」

「何って！！私達映ないと始まらないでしょ！！そんな水槽の中にカメラ入れて撮るなんて見たことないわ！！」

では、いよいよ本題の激闘に移ります。

魚捕り

## スタート

ルール！！

クマノミのいるポイントで魚を網で捕ります。ポイントはサソリが  
大きさと色合いによってきまります。  
大きければ大きい程、色が綺麗な程ポイントは高くなります。

「さあ！！始まりました激闘第一回戦「魚捕り」！！実況はカメラ  
担当の初春飾利が平行して行います」

カメラが西表島の日光で黒光りする中競技がスタートした。

御坂、白井と佐天がシュノーケルと魚捕り用のアミを装備してポイ  
ント周辺をバシャバシャと泳ぎ回る。

皆……真剣だ……

「まず、最初にアミが水面上に上がる音を響かせるのは一体誰であり  
ましょうか？」と言ったその時！！

バシャッ！！

ある者が持つアミが機敏に動き回るクマノミを捕らえ地上へとその  
姿を見せた！！「おっと！！開始1分足らずでクマノミを捕えた凄  
腕の方が……」

しかし……

「何でお前が捕ってんだよ……」

「とつたどお……」

誇らしげにアミを持ち上げていたのは、ガイドの畜生道さん。  
なんで参加してるの？

畜生道

ハマクマノミGET

せっかく捕まえということなのでクマノミを先程使っていた水槽へと投入しようとしたが……

ピチャンー!!

クマノミは、投入する寸前のアミと水槽の間に出来た僅かな隙間を掻い潜り海原へと姿を消してしまった。

「おい……」

「あつ……悪い……つてお前「口寄せ」の印を結ぶな」

畜生道

×ハマクマノミ（華麗なる脱走）

「えっと……序盤で少しハプニングがありましたが、本命の選手達にもクマノミを間近に見ることが出来て俄然やる気が出たことですよ」

初春が危つくペイン襲来編（アニメ NARUTOより）の再来になりそうな二人に向け苦笑いを浮かべ言った。

「やりましたわー!!」

そんな騒動が冷めやらぬ内に白井の歓喜の声が広がる。

白井の伸ばしたツインテールの髪が海の上で波に揺らいでいる中、バシャバシャとサソリの用意してある水槽へと入れた。

ここで追加ルール!!

水槽に入るまでが勝負です!!（要するに水槽に入れるまでポイントはつかないとの意味）

無事、水槽の中に入れられた青色の綺麗な魚は、隅の方で周囲の様子を確認するかのように動かないでいた。

「白井、1ポイント…おい、頭を殴るな…畜生道」

「……………」

ポイントを言っているサソリの頭を積年の恨みとばかりボコボコと

殴る畜生道（よほど、悔しかったのか？）

「最初にポイントが入ったのは、白井さん！！御坂さんと佐天さんも頑張って捕ってくださいね！！」

白井            1ポイント

ルリスズメGET

白熱した戦い

「おろおろおいえああうおお（訳　チヨロチヨロと逃げ回るのよ）」  
「ブクブクッ……えい、あ！！いえあああ（訳　えい、あっ！！逃げられた）」

白井の後に続きたい御坂と佐天は、シュノーケルを装備した顔を海につけて魚の奪い合いをしているらしい……

水槽が白井の捕った「ルリスズメ」でふさがっているため海上でカメラを回しているのだが選手の髪と呼吸用の筒ぐらいしか見えず、なんても締まらない映像となってしまうている。

テレビ的には定期的に顔を上げて貰って本人確認をしたいのだが「真剣」にやりすぎて一回も顔を出していない……えっらい真剣……

ということは、先程のセリフは必然的にどっちが言ったのかは皆目見当がつかないのだ（まあ、水着で見当はつきますけど……）

「ちょっとは顔だせよ……おまえら……」

編集作業ではバツサリ切られる典型の所ではありますが……今日も西表島は綺麗です！！

サソリが初春と共に各選手の様子を眺めていると（畜生道さんは、新たな獲物を求めて潜って行きました）すっかり魚捕りに熱中している御坂がプカプカとやってきた。

「おい、（御坂を指さしながら）これは誰だ？」

「御坂さんだと思いますよ……」

「直感だけど……絶対こいつは捕れなさそうだな……」

白井さんにインタビューして熱戦の様子を探る

カメラが立ち入ることの出来ない禁断ゾーンへの挑戦！！

質問 なぜ皆さんは顔を上げないのですか？

白井「わたくしもですけど……一匹大きめの魚がいまして皆さんがそれを狙っているからですの！！……でも巧みにアミを避けていくので大変ですわ」

質問 今夜は西表島で御坂さんと一緒に部屋に寝ますけど……何か作戦でもありますか？

白井「ウうえっへっへっへ……もちろんですわ！寝静まったお姉様の布団に入って、あんなことやこんなことを……」

ヨダレを垂らしながら健全な小説では書けない表現を使う白井。

しかし、白井も御坂も佐天も初春も、そしてサソリでさえも予測していない恐怖の作業「ウナギ捕り」がほぼ徹夜で行われることを……それは、後程」

再び、西表の激闘へ

相変わらず空気の筒の部分と首から背中の中しか見えていない殺風景な激闘

すると大きい魚を狙っている御坂が不機嫌そうに顔を水面から出して「とれないわよ！！！！ピュッて隠れるんだもん！！」

半ばやけくそ気味な御坂の様子を見てサソリが波に揺られながら

「いや……採れると思うぜ……お前の忍耐が足りないだけだから……貸してみろ」

御坂からアミを取り上げて自分の用意していたシュノーケルを装備

し海の中へとサソリが進出する。

「アミ取られたら私何すればいいの？」

戦いの武器をサソリに奪われ怪訝そうに悠々と泳いでいる皆の揺らいだ姿を見つめる。

一方、久しぶりに海の中に潜ったサソリは水面上では確認出来なかった地形の様子を観察して魚が来る所にトラップを仕掛けるべく泳ぐ。

「……久しぶりに水の中に入ったな……オレは砂隠れ出身だから必然的に水の少ない所だしな……」

チャクラ吸着で水面は歩いたりが多かったが水の中はそんなに入った経験が少ないサソリ。

水の中は抵抗が大きくなるため、いざ戦闘となったら避けなければならぬ場所であるからだ（水遁の術が扱えるなら問題なし）

「まったく……無計画にも程があるわね……激闘にすらなっていないじゃない。それにしても……佐天さんや黒子はまだ潜ってるわね……サソリの言う通り忍耐が足りないのかしら？」

ブクブクと海水に口を付けて溜息を吐き出していく御坂。

海水の塩分の香りが鼻につうーんとした。

そして御坂は、何気なく隣で泳いでいるサソリの空気筒に手を伸ばして、あろうこと先端の空気取り込み口を親指で塞いだ。

空気筒を塞ぐ↓サソリ呼吸出来ない↓生命の危機↓元凶を排除

という思考回路が出来上がっているサソリは脊髄反射と言わんばかりの俊敏な動きで御坂の腰を思い切り殴った。（ただし、水の抵抗により威力は弱め）

「痛っ！！殴ることないじゃない！！それにアンタ、息止めても平気で10分潜れそうな感じじゃないの！！」

「馬鹿か……そんなに潜れるわけねーだろ……それに丁度、吐き出した瞬間に塞ぎやがって」

どうやら御坂さんはサソリが呼吸の出すのが終わった時に空気筒を

塞いだようだそれは万国共通で苦しいことである。

熱戦は続く（御坂さんは、アミを取り返しました）

四人（御坂、佐天、白井、畜生道）が熾烈な争い（？）をしているが……

「地味だな……盛り上がりも一切ないし……」

相変わらず選手の皆さんは海に顔を突っ込んでいる状態なので「誰のアミが魚を捕まえそうか？」といった実況もままならない状況である。

実況の初春も言うことがなくなり黙々と地味な画を撮り続けている。

「地味と言うよりは、展開が分かりませんね……」

「中で何してるか解らんし……」

とそんな空気を感じとったのか白井が顔をパツと上げて「凄まじい激闘ですわー！」と一言。

「ん……どうする？まだ覗き穴カメラがあるから水中の映像撮るか？」

「そうです……ね、いつまでもこんな画じゃキツイですから……」

白井のつるの一声によりようやく覗き穴カメラで激闘の様子を撮ることが出来た（しかし、覗く部分を水中に対して垂直にするので初春の負担は増大してしまう）

それにしても……佐天が先程からカメラにあまり映っていない。

御坂も白井も小説的な盛り上がりを考えて色々言ってくれているのに……ただだけ夢中になっただけなの！？

水中映像（サソリの助け有り）

サソリが初春のカメラを支えるようにして初春がカメラ越しに四人の激闘を見ている。（つまり、サソリは見えていない）

初春の目の前には所有者不明のアミが珊瑚を囲むようにして縦横無尽に動き回っている。

「どうだ初春？」

「誰が誰だか分らないです……」  
すると御坂選手が試合運びに不満があつたらしく  
「ちよつと……私が持つてたアミを畜生道が取つたわよ……」  
初春のカメラには撮られていなかったので証言から推察すると……  
御坂が珊瑚の所でアミを構えて魚を待ち伏せる作戦に出ていた所、  
脇から魚を追いかける畜生道が御坂のアミが邪魔だと言わんばかり  
強引に取られたらしい。

「あたしも取られました……」ようやく水面から顔を出した熱中少女  
の佐天

畜生道被害にあつたようだ。

「畜生道が誰よりも真剣にやってるわよ……ガイドでしょこの人！  
？今日初めて西表島に来たわけじゃないでしょ……」

と御坂が言つた矢先

「とつたどお」と畜生道が顔を上げて魚が入っているアミを高々と  
掲げる。

「えつと……畜生道さんが魚を捕らえました……」

畜生道は、プカプカとサソリの元へ泳いでいき逃がさないように水  
槽へと魚を投入する。

「おい……ガイドが自慢気に捕ってるけどお前らも捕れよ……」

「畜生道さんの役回りがよく分からないですけど……」

「私達だつて捕りたいわよ……！だけど魚が速くて捕まらないのよ！  
……」

## 西表島の海原

初春が少し選手からカメラを離して雄大な海原の様子をカメラに収  
めている。

「こんなに沖の方は景色がいいのに……皆さんは下の魚ばかりを追  
つて……」

と初春が再び選手にカメラを向けた（むしろ、そっちが仕事である）

黒髪の佐天さんに茶髪の御坂さん、少し赤の混じったツインテールの白井さん、オレンジの髪の畜生道さん……そして初春の前を横切る短い赤毛の髪……

あれ？

あんまり海に潜ってない人がいたような…… って！！

「さ、サソリさん！！なんで潜ってるんですか！！？そんな事になつたら潜ってないの私だけになっちゃいますよ！！！」

涙目で必死に自身の孤独をサソリに伝えるが……

「うるせーな……やる事がないんだよ……お前はカメラを回しているからいいけど……」

まあ、役割りがないのは、サソリだけだから正論である。

とサソリと初春が小さな争いをしている中

「捕りましたわ！！！」

白井が魚を捕つたらしくアミを掲げて泳いできた。

そのアミの中に大きい魚の魚影がはつきりと映っている（逆光のため黒い）

当然、一番の盛り上がりポイントであるこの瞬間にサソリと初春は、こぞって仕事をこなした。

「おお！！やったな……白井」「結構大きいですよ」

すぐに水槽へと投入していると……

「あれ……クマノミの他にルリスズメもいるぞ……」白井が捕ったのは大きいクマノミだけでなく青く美しい姿のルリスズメがいて、水槽の中で仲良く泳いでいた。

「これは……サイズがでかいから10ポイントだな……あと小さい奴は1ポイント」

白井

大きいクマノミ  
ルリスズメ

ポイント 12

ポイント数が初の二桁になったのでその場でガッツポーズをする白井の元に御坂が近づいて……

「黒子……どこら辺で捕まえたの？」

「えっ！？……あっちの方ですわお姉様」

「なるほど……そこね……」

海賊のように襲撃するエリアを定めた御坂がゆっくりと白井が指したポイントへと移動して海に潜っていく。

さらなる魚情報

魚を捕るのに必死になっている御坂の耳に届く。

「いっぱいいますよ……」

御坂は声のした方を向き獲物の場所を特定しようとしたが……

「なにっ、どこど……！！遠！！随分遠いわね」

遙か地平線の彼方で畜生道がポイントを見つけて手を振っているがそこまで行くずくはない。

「ガイドが二匹も捕っちゃったから……訳分からないわよ……それに段々、佐天さんが海女さんに見えてきたし……」

最も競技に熱中している海女さんこと佐天が今、狙って一匹の魚をついに捕らえ水面から顔を上げた。

果たして捕まえた魚は？

#### 4、サブメニューとなった虫（前書き）

前話で指摘されたのですが文章表現で甲州弁を使ってしまうた  
！！

大変申し訳ありませんでした。

ちなみに問題の表現は

「ずくはない」です。

甲州弁で「ずく」とは「気力」といった意味になります。

#### 4、サブメニューとなった虫

「どうだ!!」

佐天が自慢気にアミをグイとサソリと初春に見せるが肝心の魚が見当たらない。「いないぞ……佐天」

「いるじゃない!!ホラ!」

と佐天が言うのでよく見るとちっちゃい黒い物体がピクピクしている。

一応、水槽の中へ

「綺麗な魚と比べると地味だな……佐天、1ポイントやるけど貸しだぜ……」

「貸してポイントはいらないわよ!!」

佐天

地味な魚(名称不明)

ポイント数 1(貸し)

佐天が貸しではなくなるような大物を探しに海に潜った矢先に御坂が歓喜の雄叫びを上げる。

「捕ったああ!!捕ったわよ!!」

つと言つてアミに入っていたのは、星形の生命物体

「……ヒトデじゃねーか」

「……魚ではないのでポイントにはなりませんよ御坂さん……」

御坂

アオヒトデ

ポイント数

0

「わかつてるわよ！！私だけが何も捕ってないから雰囲気だけよ！  
！これで感覚を掴んで大量に捕獲するわ！！」プランプランとアオ  
ヒトデの身体を振り回して言う御坂。  
ヒトデにとってはいい迷惑である。

「それどうすんだ？水槽には入れないぞ……」

「そうね……取り敢えず近くににいる佐天さんの所に落としてみよう  
かしら……えいっ！！」

御坂が軽く振りかぶって佐天の所目がけて投げつけた。

ヒトデは、綺麗な放物線を描いて佐天のすぐ前に落下し大きな水飛  
沫をあげる。「わああ！！ヒトデが飛んできた！！……ヒトデって  
飛ぶ……って御坂さんが投げたんですか！！びっくりさせないで下  
さいよ！！」

佐天が歴史的な発見（ヒトデが一人でに飛ぶ）という仮説が御坂の  
投げつけるフォームで脆くも崩れさったが……

「これで貸しは無しだな……」

よく分からないままポイントをゲットした佐天であった。

佐天

ポイント数

1

\*\*\*\*\*

あまりに風景が変わらないので初春は、先程選手の皆様が捕えた魚  
をビデオに収めていた。

「やっぱ癒されますね」かわいいです」

その水槽の先で水死体のように漂いながら必死に獲物を捕らえよう  
とする選手には、そんな余裕はない。

午後5時

日も次第に傾いていき日没が迫る中、サソリが選手に向けて呼び掛ける

「えっと……この先は誰かが一匹捕ったら終了するぞ……逆に捕らないと終われないぞ……」

日没後も海に潜るのはゴメンと言わんばかりにバタ足が加速する選手達。

最後の一匹を求め熾烈な争い

水槽カメラで激闘を生中継に入る初春。

無論、誰が魚を捕ろうとしているのかはわからない。水槽カメラに映るのは、珊瑚に隠れているクマノミを誘導しようとしている足とアミだけしか見えない。

（おそらく）御坂「足をこうや……あっ！！逃げられた！！」

御坂が華麗に魚に逃げられた時、佐天から再び歓喜の声上がる。

「捕ったー！！これは文句なしの得点よね！！」

佐天のアミの中には、小さめだが立派なクマノミが捕らえられていた。

「わあああ！！やりましたね佐天さん♪」

「最後の一匹は佐天さんに軍配が上がったようですわね！」

佐天

クマノミ 5ポイント

最後の一匹が捕獲されたのでサソリがゆっくりと左手を上に向けて終了宣言をする。

「はい……終了……1回戦の得点は……佐天は、6ポイント……白井が12ポイントだな……」

御坂↓0ポイント

ジト目でサソリ達を睨む御坂（これぞ、骨折り損のくたびれ儲け）

と思われたが！！

「「「あつ！！！！」」」

サソリを除く御坂達が一齐にサソリの背中部分を指差して一同に感嘆の声を上げる。

「ん！？…何だ…？」

半分しか開いていないサソリの目が大きく開いて自分の身体を見回すが謎の物体を捉えられていない。

「ちよつとサソリ……動かないでね」

そろりそろりと御坂がアミを持ってサソリの背中に回り込み、そしてサソリの肩胛骨辺りに振り下ろした。

「はいはい！！このまま浅瀬まで！！浅瀬まで行って！捕ってるから早く！！」

「何を捕ってるか言えよ！！アミでグイグイ押すな……」

「お姉様が必死ですわ……」

「ただ1人だけ得点0ですからね！」

少し浅瀬に移動して御坂がサソリの背中に付いていた何かをアミに収める。

「逃げられてない？」

ガイドの畜生道が水面からチョコンと顔を出して御坂のアミを下から見つめて言った。

これで逃げられていたらマズいと思うが……

「いや！！いた！！捕った！！捕ったわああ！！」

今まで、雄叫びが出来なかったからここぞばかりに大きい声でアピールする御坂。

早速水槽の中へ

「ほら！！ほら！！私が捕まえたわよ！！これこれ！！」

御坂が捕まえたと言い張る魚は、西表島の自然のコントラストとは、かけ離れた小さな茶色の魚でした。

「ふ…（失笑）…見たことないな」

「アンタの背中に付いてたわよ！

「それじゃ、サソリが捕まえ「いーや！！私のアミで捕まえたから私の獲物よ！！」

佐天の正しい言い分もジャイアンの御坂には、聞く耳を持たずルールを改変

自分のアミで捕まえた生物が得点になる（そんなルールはない）しかし、逆らうとコバルトブルーの海に大量の電流が流れそうなので……

「じゃあ…御坂に1ポイント…」

「よし！！…初めて捕まえ……これって何の生物？魚？」小さなガッツポーズをする御坂だが、自分の捕まえた生物の面妖な色彩に疑問が生まれたようだ。

御坂

不気味な色彩の魚（名称不明）

1ポイント

1回戦終了！！

得点を集計し終えたら水槽の中にいる魚を元の住みかに戻してあげる。

いわゆるリリースという物だ!!

初春が元気に帰っていく様を撮るために覗き穴から撮影してサソリが水槽を静かに傾ける。

素敵な出会いをありがとうー

放たれた魚は、一瞬戸惑いながらも力強く水をかいて泳ぐが……そこに迫る謎の2つのアミ

「捕った!! 捕ったわ!!」

「お前、やめろよ……逃がしてるんだから」

「うるさいわね!! 私だって大物を捕りたいのよ!! ここまで来て「不気味な色彩の魚」一匹じゃ納得できないわ!!」

確かに……そこで

魚を逃がし終えて空になった水槽を使って活躍出来なかった御坂に西表島の海を満喫してもらおう。

「水中散歩!？」

「そう……この水槽をヘルメットみたいにかぶってダイビングみたいな体験を試みるか……」

誰もが一度は頭によぎる考えであるが……結果は予想通りになります。

早速、シュノーケルを外した御坂に水槽をかぶせるサソリ

そして、その状態でゆっくりと御坂が海に沈んでみると（水槽の中

に空気があるため浮かび上がろうとするがサソリが上から抑えつけている格好をとる)

「凄い！！海の様子がよく見えるわ」

若干、潜もった声でしゃべる御坂だがサソリが更に上から力を与えて沈ませて水槽全体が海水に浸かったが古来からの水の原理（アルキメデスの浮力の原理）より水槽が傾いていき……

水槽の中の空気が大きな泡となって外に脱出して代わりに海水が大量に御坂の顔へと襲いかかる。

ガボツゴボツ！！

「ぶああ！！はあ、はあ…塩っぱ！！ダメこれ！！」

実験結果

浮力には勝てない

ダイビングをしたい人は、専門の所へ

水槽は魚の飼育、観察が最適である

午後6時30分

先程の水着姿から一変し、3人はジャージを身に付けアミを片手に初春の撮影するカメラの前に立っていた。

「はい…海での戦いが終わり第二回戦は海から離れて陸地で行う…」頭をボリボリと掻きながらサソリが司会を務めて進行している。

日は傾いており（地平線は海なので山岳地帯よりは若干、日光時間は長い）いつものメンバーを茜色に染めあげる。

「ガイドの畜生道（一緒になって楽しむ）が言うには、海だけでなく山にも多種多様な生物がいるらしい…というわけで「ヤシガニ」をまずは、捕獲したいと思っている。

## 激闘西表島第2ラウンド

### ヤシガニ捕り

ルール

林の中に潜む巨大なヤシガニをエサで誘き寄せて捕獲する。  
得点は、サイズを考慮

「また、唐突にヤシガニ……結構危ない奴でしょ？」

「テレビ的にかなり地味な画になりそうですわね……ヤシガニをメインにするなんて……」

もはや、文句しか言わない学園都市の実力者である。確かに、ヤシガニをメインに持つてくるのもどうかとは思うが……

しかし……

「わあ！ヤシガニってあたし初めて見るんだよね！やっぱり「カニ」って言うくらいだからハサミがあるのかな？」

ハサミの形にした両手を頭の上に持つてきてチヨキチヨキと日本の指を動かす佐天

ヤシガニ捕り

- ・エサ↓缶詰めのサバ
- ・ヤシガニが出そうな場所にサバ缶を置く
- ・夜になるまでひたすら待つ
- ・ヤシガニが来ていればポイント獲得

サソリがここまでの競技（というか暇を持て余しそうな……）の説明した所で御坂さんが再び愚痴を言いだす

「ヤシガニのエサを仕掛けるにしてもヤブに入るんでしょ？……そこで急遽、長靴（買ったばかり）が渡されたわね……」

「ああ……そうしねーとハブに咬まれるからな……」  
さらっと爆弾発言

「ハブ！！！！？」

一斉に反応する三人

毒ヘビと言え「ハブ」の有名な代名詞であるため自然の行動ととれるが……

「……それ、ガイドに指摘されるまでサソリ用意しなかったわよね！！」「いらねえだろ……」って言うてさ！！」

軽くガイドの畜生道さんに叱責されました。

ガイドがいなかったら生死を賭けたヤシガニ合戦になる所！！

注）西表島のヤブの中に入る時は長靴装備（必須）

更にハブに咬まれた時用の対処

ガイドの畜生道がこの後の競技で使うと思われる物がゴチャゴチャ入った鞆から何やら黄色い小さなケースを取り出した。

「ハブに咬まれた時に毒を吸い出す用の……」

ケースの中には、説明書のような物と注射器の形をしたスポイトが入っていた。「え！？もしかして無いの？血清……」

「テレビで見たことある……」

ハブに咬まれた時

咬まれたらスポイトで毒をすぐに吸い出すべし！！

ある程度、吸い出したら早急に西表島の診療所に行くべし！！  
そして医師の指示に従うべし！！

ガイドを交えてハブ対策の話し合いをする中、サソリが暇そうに天を仰ぐ。

傀儡の他に毒のスペシャリストであったため知識は、メンバーの中でもダントツだからだ。

「まあ……誰か死んだら人傀儡にしてやるから安心しろ……お気に入りの風影の人傀儡もなくなった（人間に生まれ変わりました）ことだし……」

「それは…ちょっと…」

ちょうどその頃

「ヘクシヨンツー！」

生まれ変わった風影ことフウエイが雑誌を片手に軽めのくしゃみをした。

「……鼻に何らかのモノが侵入したのでしょうか……追い出しに成功しました」ますます、人間らしくなっているような……

舞台は西表島へ

サソリは選手達に先程の海で使ったアミをそれぞれ渡して……

「まあ…ヤシガニ捕るって言ったけど……仕掛けに行く時にも虫等を捕まえたら一応、得点になるから……」

魚を捕る用のアミなのでアミの部分が小さめである。「……もはや、サブメニユーになった虫をこの小さいアミで捕れと……」

御坂が軽く地面にアミを傾けて文句を言う。

「まあまあ、御坂さん！ここで大量の虫を捕まえば一回戦の巻返しになりますよ！！」

ピクッ……

「よし！！待つてなさいよ西表の虫達！！根こそぎ捕まえてやるわ！！」

夕日に映える山に向かって堂々の宣誓をした。

元々、負けず嫌いの性格のため一回戦の悲惨な戦績を打開するためにもここでポイントを稼ぐしかないのだ。

「大分、お姉様の扱いが上手くなりましたね！佐天さん」

「長い付き合いですから」

ヤブに潜入

ヤブに入る前の所で佐天が何気なく振り下ろしたアミでなんと虫を捕まえてしまった。

「あ……早いな佐天…何を捕まえたんだ？」

「えつとー、トンボ…トンボを捕まえたわ」

「……まだヤブの中に入ってないから…得点なし」

「えっ！！そんなルールだったの！？」

虫を捕まえたなら得点にすると豪語したが、やはり得点集計が面倒になるので無理矢理のこじつけた。た。

その様子を聴いた御坂は、大きくうなだれて白井に聞こえる範囲で話す。

「…とうとう虫が得点にならなくなったわよ黒子……ヤシガニでどう逆転すればいいのかしら？」

「お姉様……（掛ける言葉が見つかりませんですの…）」  
気を取り直してヤブへ」

木々が生い茂るヤブに潜入して辛うじて残っている道をガイドの畜生道を先頭にして突き進むメンバー  
縦横無尽に伸びている枝を潜り抜ける。

### 天然記念物

ガイドの畜生道さんが道から少し外れた場所を指差してある珍しい生物を紹介

「ここにオオカヤドカリ（実際に生息しています）がいますよ…  
…天然記念物です」

初めてガイドらしいガイドをしてくれた畜生道の声に御坂を筆頭に白井と佐天が畜生道の指差した場所近辺に近づく。天然記念物となれば見てみたいと思うだろう。

カメラを回しているはずの初春も天然記念物を撮影するために前に出る。

「おお！！これが天然記念物か……」

「なんか敵かな感じがしますわね！！」

すると佐天が自身のアミを天然記念物に振り下ろして捕獲してしまった。

「捕れちゃった…」

キョトンとする御坂達に佐天がすっかり殻に収まってしまったヤドカリ君を摘んで見せる。

「はい、5点…」

何故か畜生道がポイントを決定。

「えっ！！天然記念物が5点なの！！？クマノミの方が上じゃない！！というか何でガイドが決めてんのよ！！」

「とりあえず佐天に5ポイントだな……オレが言うよりも先に言っちゃったからな……」

佐天

天然記念物のオオカヤドカリ捕獲

現在のポイント 11

## 5、ヤドカリ大合戦（前書き）

どうもクリスマスが近づいて、なんとなく気分がウキウキしますね  
！！

そんな時期なのに「とあプロ」は、夏の西表島を設定にしているの  
で季節感がメチャクチャです……  
部屋を暖かくして読んで下さい。

## 5、ヤドカリ大合戦

佐天がまさかの天然記念物を捕獲して早々にポイントを獲得した。

5ポイントでも一応、天然記念物なので即リリース。

天然記念物のヤドカリがいた場所もヤシガニのスポットなので早速選手の一人である御坂が慣れない手付きでサバ缶を開ける。

「じゃあ……私はここに仕掛けるから」

そう言つて割り箸をサバ缶の中に入れて、そこら辺に植物から葉っぱを拝借してサバを盛り付けた。

「これでヤシガニさんは来るんですかね？」

「それはもうわんさかと……匂いがたくさん出るように汁もかけておこう!!」

念入りに仕掛けをする最下位の御坂。

ふと思いついたように

「これ私の特許だから真似しないでよ!!」

仕掛けにサバ缶の汁をかけること↓御坂の特許

ということを他の選手に念を押す。

苦笑いしか生まれなかった。

続いて佐天さんの仕掛け

御坂の仕掛けから歩くこと10分程したエリアの林に佐天が葉っぱを皿代わりにしてサバを仕掛けた。

「じゃあ……あたしはここで……大丈夫ですよ…御坂さんの特許は真似しませんから」

恐ろしい形相で佐天の仕掛けに違法（↑？）がないか検知する御坂とチェックをしている時に再び佐天が何かを見つけて手を伸ばした。

天然記念物のヤドカリ再び「また捕まえたわ!!」 佐天が調子が良さそうにサソリの後方から遅れてやってきている初春カメラマン

に見せる。

「またか……とりあえず佐天に5ポイントだな」

「やрий」

佐天

ポイント数            16ポイント

仕掛けのチェックを厳重にしていなければ御坂も捕獲出来た獲物だった。

「くう……また佐天さんに……」

あからさまに悔しがる負けず嫌いの御坂さんだったがここで得意のクレームが炸裂する。

「ちよつと佐天さん……」

「はい？」

「あのね読者の皆様目線で小説が出来ているから、捕獲する前に初春さんのカメラで収めないと伝わらないでしょ！」

急に説明口調になった御坂を訝しげに見る佐天

つまり、佐天がレアなヤドカリを誰よりも早く捕まえる↓当然、敵の襲撃がきた！とヤドカリ君が貝の中に避難してしまうという図式が出来たのだ。

佐天が慌て地面にヤドカリを置くがそんな簡単には警戒心を解かないヤドカリ君は、引きこもりばなしだ。「慌て置いたけどね……これじゃあただの貝でしょ！動いている所を読者は見たいのよ……」

小説的にはかなりの的を得た発言によりサソリが腕を組んで軽く頷いた。

すると御坂が佐天が置いた「ただの貝」の隣で動くヤドカリを見つけて声を発した。

「あれ……隣も何か動いてる……」

御坂は初春カメラマンを呼ぶために声を出したのだが「えっ……？あつ本当だ……えい」

再び佐天がヤドカリをヒョイと持ち上げてしまった。当然、避難開始するヤドカリ君

「だから捕るなっつてるでしょ（だろ）！！！！」

サソリと御坂の強烈な突っ込みに慌て手を離すが時既に遅しとばかり仲良く隣に並んだ「ただの貝」をカメラに収めただけだった。

「忠告を守らないから佐天は5ポイント減点だな……」

佐天

ポイント数      11ポイント

「うっつ……初春……この二人の突っ込みが辛いよ……この先やって行く自信ない……」

「まあ、読者様を主体に考えているから自業自得じゃないでしょうか？」

「初春までそんなこと言うのぉ！？……がつくり」

先頭にいると多様な生命体に害を与えてしまうので初春のすぐ脇まで降板された佐天であった。

白井    仕掛ける

またまた、佐天が仕掛けた所から5分程離れた場所にあった太目の木の根元に白井がサバ缶を開けて餌を仕掛けた。

尺の関係上、白井の仕掛けへのコメントカット……！！

「ちよつと……！何なんですよ……！！」

「うるさい……佐天達のおかげで結構時間を使っちゃったからだ……文句があるなら佐天達に言え」

白井がエサを置いたことを確認するとガイド役の畜生道さんが小さな旗を片手に「次のポイントに移動しま〜す……日が暮れ始めてきたので急ぎましよう……」

第二ポイントへ移動（ヤシガニの罾は一ヶ所だけではない）

御坂達が移動したのは、先程の林とは、別の林に来ていた。

既に日の光が弱くなり緩やかな夜が自然に覆い被さるうとしている。  
「とまあ……移動を終えたがこっちが本命らしいぞ」ガイドの畜生道情報より

御坂が軽く腕を組んで林を見渡しながら誰しもが頭に過ったであろう言葉を発する。

「…今更だけど、結構地味よ！…畏仕掛けたら後は、いるかいなかを見るだけだから」

「オレだって困ってるよ……盛り上がり部分が見つからないんだ……だからさっさと片付けるぞ」

「「えええー！！！！？」」

ヤシガニの捕獲シーンが第二라운드의盛り上がりになると信じて

……

### 林の中へ侵入

林の中は日の光が特に弱くメンバーはそれぞれ驚きの声を上げる。

「暗！！もうこんなに暗いの！！？」

「うわぁ……いかにも出そう……」

「お前ら「うわぁ」とか言ってるけどまた夜中に確認しに行くんだぞ……」

「何の因果があつてこんなことしてますの……」

地面がよく見えなくなってきたので歩くのに一層気を使いながら畜生道がズンズンと先に進んで行く。

少し歩いたら木の茂りが少なくなったせいか薄明かりの空が見え、多少なりとも視界が開けた場所に到達し「……この場所……」

前を進んでいて気が付かなかったが辺りが暗くなるにつれて畜生道の「輪廻眼」が不気味な紫色を放っており、一瞬言葉に詰まってしまう選手一同。

「じゃ……じゃあ、あたしがこの場所に仕掛けます!!」

その場のなんとも言えない空気を払拭するかのように佐天がサバ缶を手にポイントへとエサを仕掛ける。

「？」

畜生道が無表情のまま軽く首を傾げる。

輪廻眼恐るべし!!

佐天がエサを仕掛けている中、御坂が近くに生えていた植物の葉っぱに小さいバツタがちょこんっ!と乗っているのを見つけて初春とサソリを呼ぶ(佐天とは違い)

「見たことないバツタがいるわよ………(何故か小声)」

「これで最初は、1ポイントや2ポイントだ!!って騒ぐのは地味だったな……」

サソリがバツタの乗る葉っぱを揺らして逃がすかのように促した。

再び、離れた場所に今度は御坂が皿に使う用の葉っぱを西表島の自然から拝借して、「私はここに仕掛けるわよ!!」

そして、白井も他の二人とは違う場所(なんかヤシの木みたいな葉っぱがうなだれている所付近)にサバ缶の中に残っていた全てのサバを仕掛ける。

ガチで暗くなってきたので仕掛け終わったら駆け足で林を出ました。初春のカメラのブレがあまりに酷かったのでカット!!ちなみに、ヤシガニ捕りは夜中の10時から11時位に確認しに行きます。

それまで自由時間である。「お姉様!!これからわたくしとデートを!!」

「遠慮しておくわ……」

さあ、果たしてヤシガニはかかっているのか!?

ドキドキの西表島の夜

\*\*\*\*\*

午後10時10分

工事現場のような頭に巻くタイプの懐中電灯と夜は蚊が多いので「お外で使えるノーマット」を装備して、いざ仕掛けた場所へ！！

「こんな時間に外をうるついて良いの？補導されない？」

「大丈夫だろ……いざとなったら逃げるから」

「「逃げるの！！？」」「」

夜の日程のおさらい

・ヤシガニ捕獲

・カエル捕り（大ウナギのエサ用）

・大ウナギの捕獲用の罠を仕掛ける（早朝、捕獲に伺う）

・ハブを見る（出来れば捕獲）

ハブは畜生道さんの強い要望により急遽決定しました。

ハードだ……

「ハブなんて絶対捕まえないわよ！！！」

「見るだけでゾクゾクしますわ！！」

「そうですか……結構かわいいと思いますよ」

「いや、それ初春だけだから……」

初春の屈託のない笑顔に自然とため息が出てしまう選手達であった。

ヤシガニ捕り 第1ポイント

もう！！真っ暗！！

選手達の装備している懐中電灯とサソリの懐中電灯が唯一の光源であり、街灯等というシャレた物が林に置いてあるはずがないので光が無ければ「一寸先は闇」の状態である。

さて……仕掛けを確認する前に現在のポイントを確認「えっと……

現在の点数状況は……佐天 11ポイント」「白井 12ポイント」

で……そこにいる電気（御坂さんのことです）は「1ポイント」だな……」

サソリが集計したポイント表を片手に淡々と読み上げていく。

「ちよつと……電気って呼ばないでよ！！なんか絞り取られそうデヤダ……！！」

さて、気になるヤシガニのポイントは？

獲物が獲物だけに結構高得点が期待出来る感じた。

「ヤシガニは……10ポイントでいいか…畜生道？」

「オーケーです……」

「何で畜生道が決めてんのよ！！天然記念物に5ポイントって付けた人よ！！いい加減どんな基準で点数付けてるのか知りたいわ！！！」

御坂の主張に腕を組んで考えた後、何かを閃いたかのように手を叩いて

「じゃあ…15ポイントで…」「だから！！基準を言いなさいよ！！！！ヤシガニの点数が悪いから言ったわけじゃないの！！」

どうやら畜生道は、（最下位の）御坂の野次に対しては、深く考える必要がないと考えて犬の躡のようにエサを与える程度にしかエネルギーを使わないようにしているらしい。

要は実力を重んじるということである。

「はいはい……御坂選手も頑張つて下さい…優勝は無理でも「読者を楽しませたで賞」を心の中で贈りますから……」

無表情で御坂の頭をなでなでする畜生道に御坂が悔しそうに地団駄を踏んだ。

「ぜええったい！！一位になってやるわ！！あのガイドを見返してやる！！」

御坂は自身が仕掛けたポイントへ腕を大振りに突き進んで行った。

「御坂さん行っちゃいましたよ……大丈夫でしょうか？」

「事実だからどうしようもないな……」

「お姉様待つてください!!」

最初の御坂の仕掛け

懐中電灯を片手にガイドの畜生道が正確に御坂を仕掛けまで誘導した。

「よし!! 一気にポイントを稼ぐわ…… よ!？」

御坂が灯りを照らすと仕掛けたサバ缶に覆い被さるかのようにヤシガニが雄然と食事をしていた。

「いた…… 御坂に15ポイント……」

普通ならば大量得点で歓喜の声を上げる所なのだが、御坂は近くの木に身を潜めるかのようにして遠巻きにヤシガニを見ている。

「ヤシガニってあんなに大きいの!!? 何処持てばいいのよ?」

体長が約40cmを超えているヤシガニの大きさに思わず臆してしまっただ。

同じように……

「デカ過ぎですの!! さらに夜ですから迫力が!」

「ダメだってサソリ!! 明らかに蟹さんサイズじゃないわよ!!」

各々、初めてみる野生のヤシガニの感想は、あまりの外観から「怖い」の一言で片付いてしまうものであった。

ちなみに、ヤシガニという名前がついているが蟹の仲間ではなく、どちらかと言えばヤドカリに近い仲間である。

さっきからヤドカリが出まくりだが気にせず。

御坂

ヤシガニ捕獲

現在のポイント 16

一応、手で捕獲しないとしまらないため畜生道がまずは、手本を見せることにした。

畜生道がお食事に夢中になっているヤシガニの背後に回り込み忍び足で近づくと不穏な気配を察したヤシガニ君は、後ろを振り向かず

に前方へともうダッシュ！！

初春のカメラのスピードも追い付けぬ程の速さであった。

慌て初春がカメラをヤシガニの向かった方向へと動かしたが……

ヤシガニの移動した先には、選手各位がいたわけで……

「ぎゃあああ！！こつちこないでよ！！何気にかなり速いし！！」

「ちよつ、御坂さん！！自分の獲物ですから捕まえないと逃げちゃいますよー！！」

「そんなこと出来るわけないでしょー！！そうだ、黒子空間移動で私達から離れさ……っていない！！」

既に能力を発動してヤシガニの移動方向とは逆サイドにテレポートしていた白井。

「あんな速い物体には無理ですわ……お姉様の無事を祈ってますの……頑張つて下さいませ！！」

小さく合掌……そして要らない応援。

「アンタ、風紀委員でしょ！！逃げてどうすんのよ！！！！」

「訓練にヤシガニの捕獲術は習いませんでしたよ！御坂さん！！」

「私達だつて初戦よ！！」

白井の代わりに初春が真剣に答えたが正直いらぬ情報であつた（言い訳にすらなっていない）

その間にもヤシガニの猛攻が二人に迫る。

大きく広げたハサミを掲げ重戦車のような風貌で迫ってくるので現場は、大パニックとなつた。

しかし意外な救世主が現れ……ヤシガニをいとも容易く持ち上げる。「別に毒も持っていないから大丈夫だろ……慌て過ぎだぞお前ら……」涼しい表情を崩さずに片手でヤシガニを持ち上げる姿はまさに、「ヤシガニを取り続けて何十年のスペシャリスト」の風格を醸し出し

ていた。

「はあ、はあ助かったわ!!」「ありがとう、サソリ」

やっと苦難が去り一息つく御坂と佐天。

「ったく……まだまだヤシガニの仕掛けは、してるんだぞ……大丈夫か？」

軽くため息をしながら踵を返してガイドの畜生道に渡そうとしたが

……

「言わないんですか？せつかくの捕獲したのに……」

「何のことだ？……早く受けとれよ……」

そう、せかすサソリの右手にはさっきまで暴れ回った暴君が忙しく足をワシヤワシヤツ!!と動かしていた。

その珍妙な光景に思わず顔が青くなってしまう選手達。

畜生道は、サソリからヤシガニを受け取り声の調子を整えるかのようにな一回咳払いをした。

「じゃあ……サソリさんの代わりに私が言いますね……」「捕ったぞお!!」「……」

高々とヤシガニを上に掲げて捕獲したことを大自然に報告する畜生道さん。

「お前……それをオレに言わせるつもりだったのか……」

次回、地獄の夜が遂に幕を開ける。

今夜は眠れない!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0861o/>

---

とある暁の企画(プロジェクト)

2011年10月9日23時44分発行